

月報

反核太平洋

# パンフィカ

●特集号●

ドキュメンタリー映画

脅 HOTET  
URKKADUS 威

チェルノブイリ原発事故で  
死の灰の“直撃”を受けた  
サミ(ラップ)の人々は――

はじめに	1
------	---

ドキュメンタリー映画

# 脅 威

HOTET  
URUKADUS

映画紹介	山本知佳子	2
解説	ラップランドをおそった放射能	7

●入門編● 放射能とは	10
-------------	----

《インタビュー》 ラップランドを取材して	七沢 潔	12
-------------------------	------	----

《発言》 チェルノブイリですべてが変えられた	ポール・ドーイ	16
---------------------------	---------	----

《資料》 スウェーデンのサミ(ラップ)人	スウェーデン協会	21
-------------------------	----------	----

ドキュメンタリー映画

# 脅 威

HOTET  
URUKADUS

日本語版台本	24
--------	----

スライド、映画などの紹介	35
--------------	----

【表紙】スカンジナビア半島北部で遊牧生活を営むサミ(ラップ)の人々は、チェルノブイリ原発事故で死の灰の“直撃”を受けた。たった一度の原発事故がサミの人々になにをもたらしたのか。生活、文化、生き方をどう変えたのか。映画『脅威』は、サミの人々のチェルノブイリ後を、彼らの生活のなかから描いている。



# はじめに



映画の冒頭、北欧の美しい大自然と、そこに生きる野生動物たちの風景のなかに突然浮かびあがるトナカイの黒い死体、頭上に不気味な姿をあらわすヘリコプター。それが何を意味するのか、映画の進行とともに私たちは恐るべき事実を知らされることになります。

この映画『脅威』は、“文明”が“文化”を虐殺していく記録であり、画像の美しさとは裏腹に、悲痛な映像詩でもあります。

スカンジナビア半島の北部でトナカイの遊牧生活を営む少数民族サミ（ラップ）の人々は、豊かな大自然のなかに、生活のすべてをつくりあげてきました。ところが、チェルノブイリの死の灰が彼らの地を突然襲った「あの日」以来、彼らの生活は根本からくつがえされてしまったのです。

トナカイとともに暮らし、肉を食べ、皮で服や靴をつくる生活、自然をあずかりものとして、父母から子や孫へと受けついできたサ

ミ人の生き方、西欧の価値観や文化をしりぞけつくりあげてきた独自の文化が、たった一度の原発事故、それも彼らとは関係もない、1500キロも離れた原発の事故で、根こそぎ奪いとられてしまったのです。

“原発”とはもっとも遠くにいるはずの人たちが、実は最大の犠牲者になってしまった現実。

「電気も道路もない、そんな私たちがなぜ、世界の進歩とか発展とかの犠牲にならなくてはならないのですか」 — というユンさんの言葉は、私たちへの問いかけでもあります。

彼らの暮らしぶりと、サミ人の夫婦ユンさんとリリムールさんの淡々とした語り口のなから、サミの人たちの心が伝わってくる作品です。

## 各地で自主上映を!

私たちにとっては、『ハーフラيف（半減期）』につづく映画第2弾『脅威』の日本語版は、3月27日のトーク&映画祭での初上映以来、各地をまわっています。フィルムを貸し出しますので、各地で自主上映会を計画してください。『ドキュメント・チェルノブイリ』との併映や、お求めがあれば、講師の出前も行ないますので、気軽にお問い合わせください。

ドキュメンタリー映画

**脅威**  
HOTEL  
UNIKKADUS

1987年 スウェーデン

ステファン・ジャール監督 Stefan Jarl

日本語版製作：反核パシフィックセンター東京

ベルリン映画祭特別賞、国際ドキュメンタリー協会賞  
ほか受賞

16ミリ(マグネット音声) 72分 カラー

貸出料1回3万円

●フィルム貸し出しの問い合わせ先●

反核パシフィックセンター東京 ☎03(815)1648

〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内

■「脅威」京都連絡先 ■ 075(751)2808 安藤

■「脅威」札幌連絡先 ■ 011(746)2801 ひらひら 大嶋

ドキュメンタリー映画

# 脅威

HOTET  
UHKKADUS

## 映画紹介

1987年 スウェーデン

ステファン・ジャール監督 Stefan Jarl

日本語版製作:反核パンフィックセンター東京

山本 知佳子

(ベルリン在住)

ベルリンでは毎年3月、ベルリン映画祭が開かれ、世界各地から集められた数々の興味深い映画が上映されます。その層の厚み、深さ、範囲の広さには、いつも感心させられます。

今年もたくさんのフィルムがやってきましたが、きょうそのなかのひとつを見て、大変心を揺さぶられました。「脅威」と題するスウェーデンのフィルムで、チェルノブイリ原発事故によってサミ(ラップ)人の生活が壊滅的な打撃を受け、生存基盤そのものが失われつつある状況を描いたものです。

スウェーデンの少数民族サミ

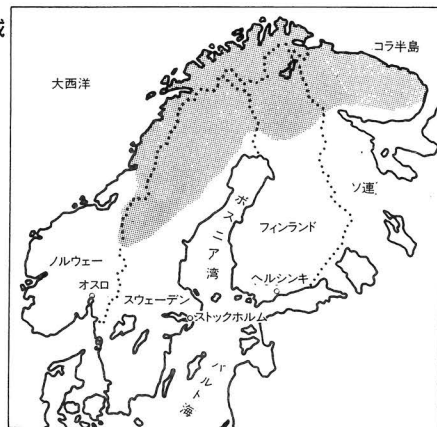
(ラップ)人は、独自の言語、生活様式、文化を守り、トナカイの飼育を営みながら、いわゆる科学技術の発展などといわれるものとは最も無縁なところで、自然に密着し、自然とともに生きてきました。フィルムは、大自然のただなかで生きる彼らの姿を淡々とうつし出します。電気はありません。自ら粉をこね、木を削り、食物は自給自足、靴もトナカイの皮でつくる生活。トナカイの放牧。しかし、自然とともに生きる彼らの生活は、「あの日」を境に変わってしまいました。変わらざるをえなくなってしまったのです。

事故直後、風はスカンジナビアの方向に向かい、スウェーデンは、最も汚染のひどい放射能の雲の直撃を受けました。そのためスウェーデンは、他のヨーロッパ諸国と比べても、チェルノブイリによる放射能汚染が一

▼生まれたばかりのトナカイの耳にマークをつける



### サミ(ラップ)人の居住地



Source: Gunnar Rönn. *The Lapps in Sweden*, 1961

段と深刻になっています。しかも自然と密着して生きていければ、被害は深刻なのです。

トナカイは汚染がひどすぎて、9割近くが市場に出せません。国は汚染の広がりを防ぐために、トナカイの屠殺を命じました。

サミ人たちが住み、トナカイが放牧してあるのは、人里離れ、交通の便もない奥深い山のなかであるため、国はヘリコプターを動員し、トナカイの死体をつるしあげ、運んでいきます。

いたるところで環境汚染がす

すみ、自然が破壊されていく世の中にありながらも、サミ人たちは、豊かな自然環境を守りつづけてきました。そこには失われつつあるありのままの自然の姿が、まだ厳然としてあり、そこに住む人々は、自然との調和



のなかで生きてきたのです。ところが、チェルノブイリの放射能は、一夜にして彼らの生活をひっくり返してしまいました。現金収入源だったトナカイは、もはや放射能のゴミと化してしまったのです。

フィルムのなかでサミ人のひとは語ります。「自分たちはいつも自然のなかで生きてきた。自然の掟にさからわず、動物たちと共存し、いつも動物たちのことを考えて、決して彼らを苦しめないようにしてきた。トナカイたちが山に行きたがれば山に連れてゆき、森に行きたがれば森に連れていった。ところがチェルノブイリ以来、すべてが変わってしまった。あれ以来、注意を向けなければならないのは、動物たちの意志ではなく、セシウム値の値になってしまった。トナカイが森に行きたがっても、放射能のひどい森には、もう連れていくことができない。自分たちが今まで大切にしてきた規準を変えねばならなくなりました。でも、こんなことを続けてはいかれない。自然のなか



で、自然にさからって生きるなんて!」。

生活の仕方を変えるということは、生き方そのものを変えるということ、「文化」そのものが変わってしまうということにほかなりません。チェルノブイリはサミの人々の「文化」を破壊したのです。

「トナカイの仕事が不調なときは、魚をとり、狩猟をして、現金収入をえることができた。“あれ”以来、もう、それもできない。汚染された魚を誰が買

いますか。毎年、秋になると、冬のたくわえにするため、魚をとりに行くのが習慣だった。ところが、もうそれも過去のことになってしまった。去年の秋、魚をとったのが、あれが“最後”だったなんて……。そんなことを考えてもみなかった。あの秋の魚つりが、もう過去のものでしかないなんて……」。

「そんなにひどくはないんじゃないか、きっとこのまま何とか生きていけるのではないかと思ったりもするけれど、部落に足を踏み入れるや否や、“あれ”以来、変わってしまった雰囲気気づかざるをえない。もう終わりなんだとは信じたくないし、そうであってはほしくないけれど……」。

※ ※ ※

フィルム上映ののち、監督と、フィルムに登場したサミ人の夫婦が会場に姿を見せ、ディスカッションの時間を持つことができました。

トナカイの肉からは、1キログラムあたり6万～7万ベクレルといった値が検出され、まず

#### ▼夏の野営地のラウシ・ユンとリリムールさん





▲「すべてが奪われました。何も残っていません」と語るリリムールさん

ほとんどすべてが廃棄せざるをえないのだそうです。肉が食用として食卓にのぼることの危険を防ぐため、また今年の夏、こうした極度に汚染されたトナカイが出産の季節を迎えたときに何が起るかわからないという不安から、多くのトナカイが屠殺され、今までのところ約3分の1が、すでに処分されたということです。

会場からは様々な質問が飛びかいましたが、それに答える監督の声は次第に打ちふるえ、しほり出すような声で、言葉を選びながら「これがカタストロフィーでなくて何ですか。ひとつの文化が破壊されたのです。トナカイを奪われたサミ人に、政府は補償金を払い、生活だけは、どうにかしていかれる。でも、彼らの文化はどこに行ってしまったのか。国などにはまったく頼らず、自然のなかで独立して

生きてきた彼らが、今、国のくれる補償金によってしか生活していくことができなくなってしまった。自然を最も大切に生きてきた彼らが、自然のなかで生きていくことが許されなくなってしまった。トナカイは殺され、死体ごとヘリコプターで運びさらわれてゆく。トナカイは食用であるだけでなく、服や靴もトナカイの皮でつくっていた。今はそれも、もうできない。これまで自給していた食糧や、靴を、これからは政府のくれた金で買わねばならなくなった」と語りました。

「サミ人の生活が脅かされていることを知って、トナカイごとカナダに移住しないかという話を持ってきてくれた人もあったし、アメリカ・インディアン

の女性たちは、魚を送ってくれたりした。でも、それもこれも、何の解決ももたらさない。解決

策などないのですよ！ 誰ひとり、どうしていいかわからずにいる。スウェーデンの政府も学者も、誰もがどうしていいかわからない。トナカイを殺すのも、それが一番いい方法かどうかかわからないけれども、とにかく、そうしてみるしかないからしていることで、本当は誰も彼もお手あげなのだ。ただ、とにかく今は補償金を払って、まるで何事もなかったかのように、これまで通り、生活を続けていくしかない」。

怒りと悲しみを隠さず、声をさらにふるわせて彼が「私たちはどうしていいかわかりません。どうしたらいいかわかる人がいたら、教えてください」と会場に向かって叫んだとき、私自身、言葉にあらわすことのできない感情につき動かされて、胸がいっぱいになりました。この声にできるだけ多くの人が耳を傾け



▲夏のトナカイ放牧地

てほしい、この人たちの言葉にならない悔しさを感じてほしいと思わずにはられませんでした。彼らが直面している「脅威」は、私たち自身の「脅威」でもあるはずです。

「文化が虐殺されつつある。サミ人は、自分たちの文化を子供たちにどう教え継いでいったらいいのか、わからなくなってしまった。それにもかかわらず、まるで何事もなかったかのように、まるで未来はまだあるかのように、生活を続けなければならない。政府は、金は払っても、文化などには目もくれない。文化が死に絶えようと、そんなことにはかまわず、ただ補償金を払うだけだ」。

どうしていいかわからない、まるで戦争のようだ。これがカタストロフィーでなくて何だろうとくり返す監督の姿に、ひど

くつき動かされ、改めて“あの日”のことを思いました。そして、1年たつたたたないかのように、まるで過ぎさったこと、他人事であるかのように、多くの人たちがチェルノブイリを忘れさろうとしているのを見ると、どうしてもいらだちを覚えてしまいます。監督自身が、この言いやうのないいらだち、怒りとたたかいながら、唇をかみしめて、フィルムを回したに違いないと思います。「こんなフィルムをとらずにすんだら、どんなにうれしかっただろう」という彼の深い悲しみが、その語り口からひしひしと伝わってきて、やりきれない思いにさせられました。

ひき続き汚染が進行している西ドイツでも、チェルノブイリの衝撃を忘れようとしている人たちが少なくありません。それ

は放射能が目に見えないから、影響がすぐには出ないからだけではないと思います。エネルギーを浪費し、あり余る“もの”に囲まれて、自然とともに生きる姿勢そのものを失っているから、自然を脅かすものの存在を感じるができなくなっているのではないかと思います。

きょうは3月1日。反核太平洋の日。自然のなかでくらしてきたマーシャルの人々が、島を追われ、生活基盤を奪われ、文化そのものを脅かされてきた歴史を、放射能まみれの自然のなかにほうりだされたサミ（ラップ）の人たちもくり返さねばならないのでしょうか。

1987年3月1日










### ラップランドをおそった放射能

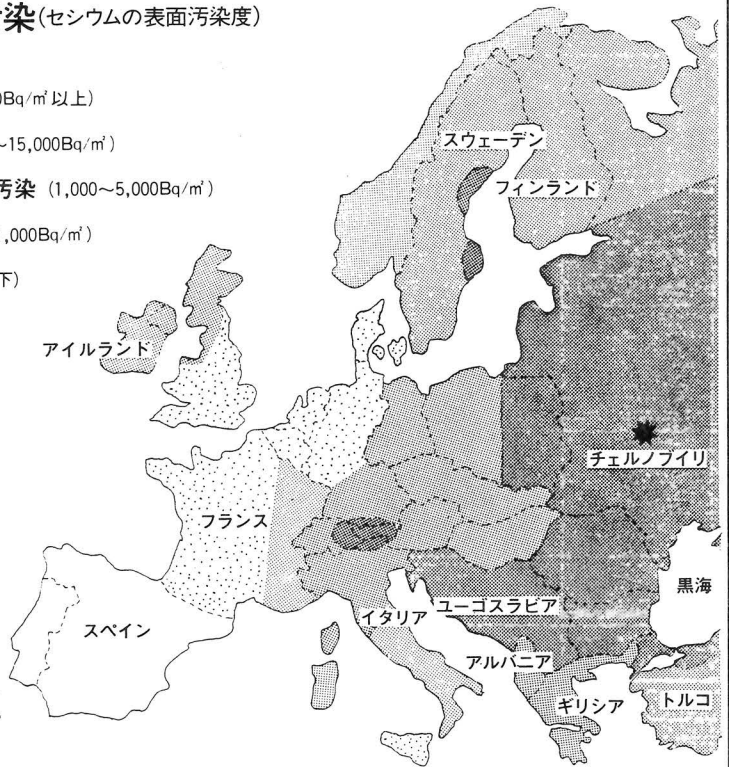
チェルノブイリ原子力発電所の事故によって、数億キュリーと推定される放射能が、ヨーロッパ一帯にばらまかれた。放射能は最初北西に風に乗ってとび、スカンジナビア半島一帯では、4月27日夜から28日早朝にかけて、強い放射能が検出され始めた。チェルノブイリ原発で事

故が起こったという事実が世界中を駆けめぐった発端は、このスウェーデンで異常放射能が検出されたからだった。このとき雨が降っていたこともあって、スカンジナビア半島には、ホットスポットと呼ばれる汚染のとくに強い地帯が生じた。その後、風向きは西向きに変

わって、西ヨーロッパや南ヨーロッパにも放射能雲をもたらし、その行く先々を汚染することになった。南ドイツやスイス、北イタリアなどでは、雨によるホットスポットが生じた。東ヨーロッパやトルコもひどく汚染された。ラップランド地方と呼ばれる

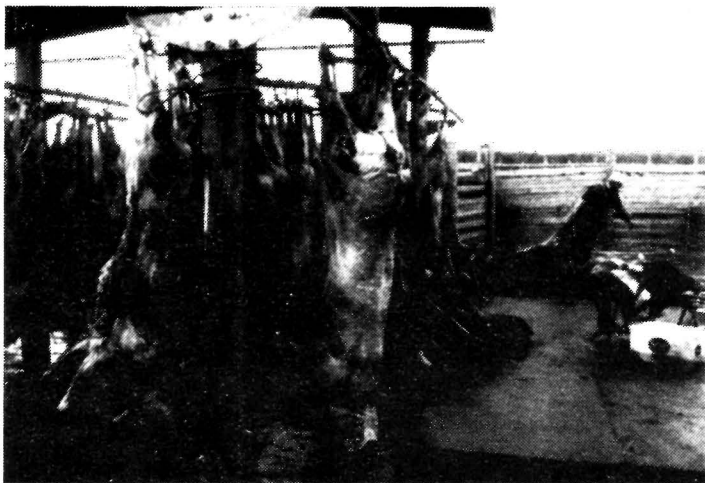
ヨーロッパの放射能汚染(セシウム295の表面汚染度)

-  強い汚染 (およそ15,000Bq/m<sup>2</sup>以上)
-  やや強い汚染 (5,000~15,000Bq/m<sup>2</sup>)
-  ヨーロッパの平均的汚染 (1,000~5,000Bq/m<sup>2</sup>)
-  やや弱い汚染 (100~1,000Bq/m<sup>2</sup>)
-  弱い汚染 (100Bq/m<sup>2</sup>以下)



国名が記入された国々は、規制値を超え日本で積み戻しとなった食品の産国です。

(『原発早わかり図解シート』より)



▲屠殺したトナカイは汚染がひどく、出荷できなかった

スカンジナビア半島北部からコラ半島にかけては、トナカイの遊牧を営むサミ（ラップ）人が住んでいる。人口は4万人から5万人といわれ、スウェーデンには1万5000～1万7000人のサミ人が住み、うち約2500人がトナカイとともに生活している。彼らにとってトナカイは、生計を支えるものであると同時に、主食でもある。スウェーデンに

は約25万～28万頭のトナカイがおり、毎年7～9万頭がおもに食用として屠殺されている。

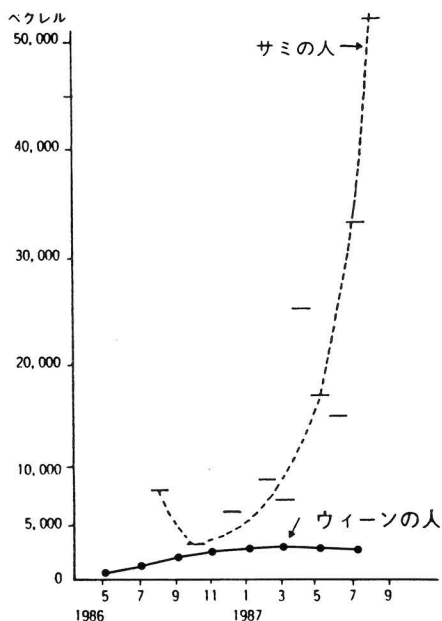
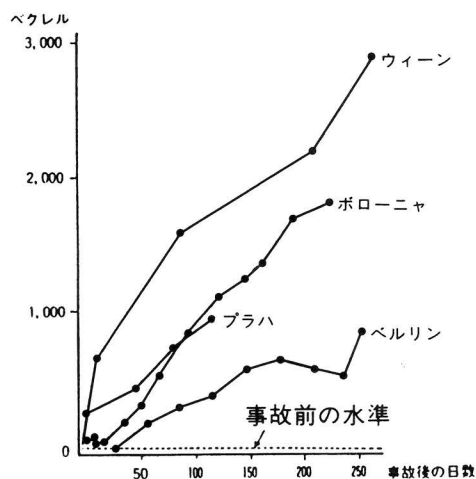
チェルノブイリ原発事故の直後から、放射能が彼らの地に降り注ぎ、植物、とくにコケ（トナカイゴケ）がまず汚染された。このコケは、放射能をとりこみやすく、しかも放射能をなかなか外に出さない性質を持っている。そのため、コケの放射能汚

染値は高く、事故後1年半たった1987年秋の時点でも1キログラムあたり2万5000ベクレル（セシウム137のみの値）に達している。このコケを主食とするのがトナカイである。

1986年の秋の収穫期に屠殺されたトナカイは8万頭。しかし、スウェーデン政府が決めた許容基準1キロあたり300ベクレル（セシウム137）以下だったのはわずかに1万2000頭のみ、残りのトナカイ肉は出荷が認められず、ミンクやキツネのエサなどにまわされた。

トナカイはその後コケを食べつづけたため（とくに冬場トナカイはコケのみを食べる——トナカイが冬のあいだ生きつづけられるのはこのコケのおかげだ）、トナカイの肉の放射能はさらに増加した。にもかかわらず1987年5月、スウェーデン政府は、トナカイの肉の許容基準を従来の5倍、キロあたり1500

### 人体中のセシウム137



(『食卓にあがった死の灰 パート3』より)



▲ヘリコプターで運ばれていくトナカイの死骸

ベクレル（セシウム 137）にひき上げた。1987年秋、トナカイ肉のセシウム 137の汚染はキロあたり平均約 4500ベクレルとなった。なかには数万ベクレルに達するものもあった。ある学者は、トナカイの汚染は今後少なくとも 25年間は続くと言っている。

出荷停止になったトナカイについては、政府が補償を出すことになった。また、これ以上トナカイを汚染させないため、トナカイを囲いこんで、汚染されていない飼料を与えはじめる人々も出てきた。これも政府の補償金が出る。しかし、こうしたことは、政府に頼る生活であり、何より、トナカイ遊牧を土台に自然とともに生きる彼らの生き方を一変させるものだ。

トナカイはサミ（ラップ）人

にとって生活の基盤であり、文化である。サミ人は、自分たちとはまったく無関係の原子力発電所、それも 1500 キロも離れたたった 1基の原子力発電所の事故で、その文化を根底からくつがえされようとしているのだ。

映画のなかで、サミ人のユンさんは語る——「ここには電気も、道路もありません。そんな私たちがなぜ、世界の進歩とか発展とかの犠牲にならなくてはならないのですか。関係もないぜいたく品のために、罪のない人々が苦しめられているのです。私たちの文化全体が、根底からくつがえされてしまったのです」

現在、彼ら自身の体内に、放射能が蓄積しはじめている。左のグラフは、サミ人の人体中の

セシウム 137が蓄積していくさまを示したものだ。ウィーンでの人体中の放射能値はヨーロッパのなかでも高い方であるのに、サミ人と比べると低いように見えてしまう。

映画のなかでユンさんは語る——「ええ、おそろしいことです。こんなことは許してはならないと、みんなが言うべきです。すべての原子力発電所を閉鎖すべきです。すべてをです」

（宮内泰介）

注）キュリーもベクレルも放射能の強さを表す単位。1ベクレルは、1秒間に1回原子が崩壊するときの放射能の量。1ベクレル=27ピコ・キュリー（ $27 \times 10^{-12}$  キュリー）



## ●入門編●

# 放射能とは



放射能というのは、放射線を出す能力のことで、転じて放射線を出す能力をもつ物質（放射性物質）そのものを意味します。放射能が恐ろしいのは、そこから出る放射線（アルファ線やベータ線など）が人体をさまざまな意味で傷つけるからです。

### 急性障害

人間が放射線をあびると受ける影響のひとつが急性障害です。急性障害には、吐き気、めまい、脱力感、下痢、頭痛、白血球の減少、皮膚炎（やけど）や脱毛などがあります。

人間があびた放射線の量（被ばく線量）をあらわすのにレムという単位がありますが、急性障害はだいたい25レム以上をあ

びると起こり、100レム以上で急性の死が起こり、350～400レムでは半数が死亡、600レム以上になると、あびた人のほとんどが死んでしまうといわれます。

### 晩発性障害－「安全量」はない

これに対して、原発事故の放射能汚染で重大なのは、数カ月から数年、ときには数十年たってからあらわれる晩発性障害で、ガン、白血病、生殖能力の減退、早く歳をとってしまう「加齢現象」、そして遺伝的影響などです。

晩発性障害の恐ろしさは、まず第1に、被ばくしたときには自覚症状がなくても、何十年かたって突然あらわれること、第

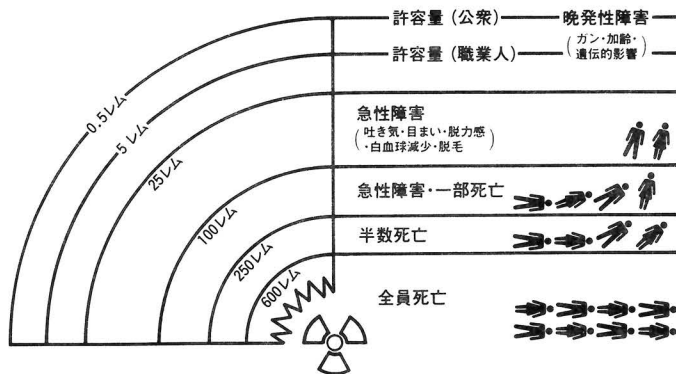
2にこれ以下なら絶対安全という境界線（「しきい値」といいます）がなく、どんなに低い放射線でも被ばくすれば何らかの影響が出てくることです。つまり、何年かたってガンになったり遺伝的影響が出たりする危険性は、被ばく線量に比例して大きくなり、逆に被ばく線量が少なくても発病の確率が減るだけで、けっしてゼロにはなりません。

### 放射能が体にはいると

チェルノブイリ原発事故によって噴き出された死の灰（放射能）は、風によってヨーロッパ全域を汚染し、ホットスポットと呼ばれる高濃度汚染地帯を残しながら、世界中へと運ばれました。放射能は水や土を汚染し、さらには食物連鎖を通じて動植物に入り、蓄積・濃縮します。そして食物をとおして私たちの体に入り、体内で長いあいだ放射線を出しつづけることとなります。

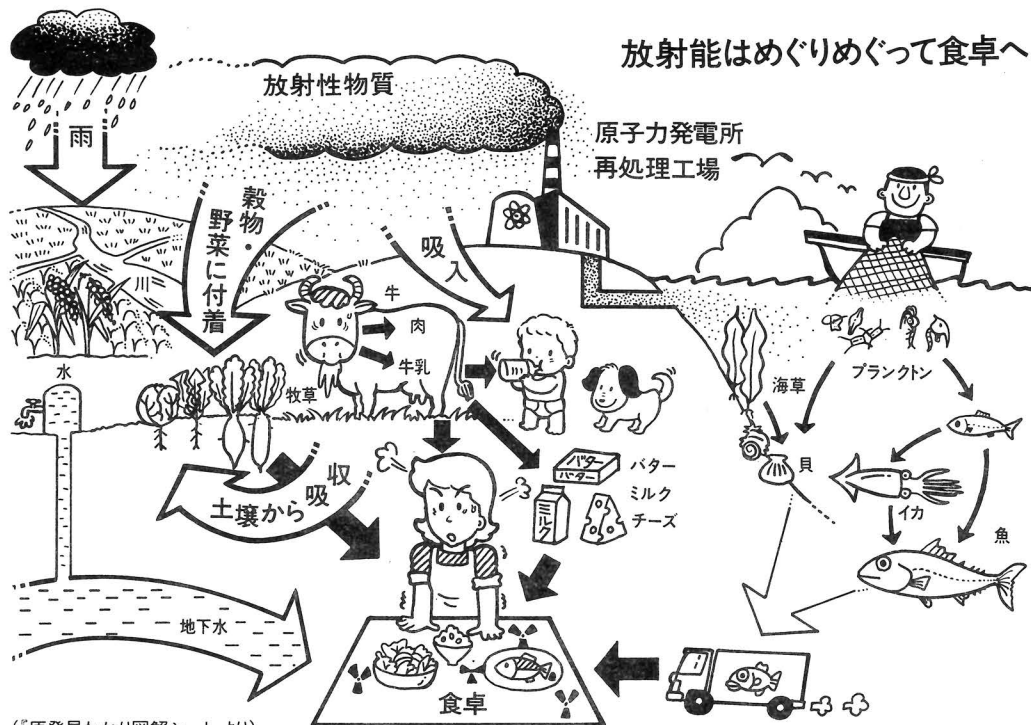
体内に入った放射能は、ヨウ素は甲状腺や卵巣に、ストロンチウムは骨に、セシウムは筋肉や卵巣にと、その種類によって

## 放射線の人体への影響



(『原発早わかり図解シート』より)

## 放射能はめぐりめぐって食卓へ



(『原発早わかり図解シート』より)

特定の組織や臓器に蓄積する性質があります。そして周囲の細胞を傷つけ、ガンなどを起こす原因となります。目にも見えず臭いもない放射能が、じわりじわりと体をむしばむことになるのです。

### 長寿の放射能

しかも放射能は、煮たり焼いたりしてなくなるものではありません。寿命が長いのが放射能の特徴で、チェルノブイリで大量に放出されたセシウム137の場合、半減期が約30年（セシウム134は半減期2年）、つまりひとたび核分裂によって人工的に生み出されると、半分に減るまで30年かかり、60年たっても現在ある量の4分の1にしかならないのです。これから長期間にわたって、放射能汚染とその

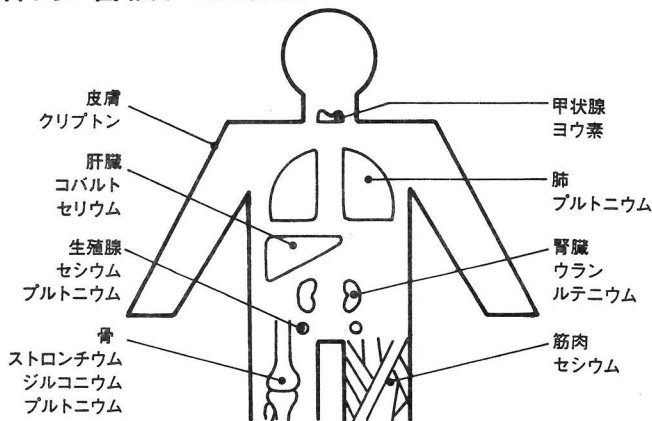
影響はつづくこととなります。

現在、日本では、被ばく線量の「許容量」を、一般公衆で年間0.5レム、職業人（原発労働者）で5レムと決めています。また輸入食品に対しては、1キロあたり370ベクレルの汚染まではよしとする基準を決めています。これらの基準はあます

ぎると考えざるをえません。

しかも、こうした「許容量」が、それ以下なら安全という量では決していないこと、この程度はがまんしろという「がまん量」であって、「放射線に安全量はない」ということを、あらためて心にとめておく必要があります。

### 体内に蓄積する放射能



## 《インタビュー》

# ラップランドを取材して

七沢 潔 (NHK社会教養部ディレクター)

スウェーデンに行くことになったのは、市川定夫さんがアムステルダム会議から帰ったときにお会いして、サミ(ラップ)人の食習慣を含めた被害が深刻だということをおぼろげにうかがったのがきっかけでした。

チェルノブイリたった一基の事故で、ヨーロッパ全域でみると大気圏核実験の時代に降った10年分に等しい量のセシウムが降ったといわれているんですが、今回の特徴は、何千キロも離れていながら、風向きでウクライナ南部以上に汚染を受けた地域＝ホットスポットができてしまったことです。しかもその地域

が極めてストレートな食習慣・生活形態をもって、食物連鎖により汚染が濃縮して直接体にくるとするなら、核実験の時代とは比べものにならないくらい、より深刻な事態になりうるだろうと考えて、そういう意味でヨーロッパで最も深刻だと思われるスウェーデンに出かけたんです。

それと外界の放射能は、時間がたつにつれ減っていくわけですが、その分が食べ物や他のものに回っているわけで、放射能がそういうふうには、しつこくめぐるということを解き明かせないかということがありました。

## トナカイが食べられない

チェルノブイリから1500キロ離れたこの南ラップランドの人々は、秋に森や原野からトナカイを追いこんで、主にそれを食肉用として出荷して生計をたてる暮らしをしてきたんですが、事故後の1986年の秋、スウェーデン全体で8万頭捕獲したトナカイのうち、70%が出荷できなかったというスウェーデン中部、ラップランドとしては南部のところに行きました。

取材したレイフ・ラーソンさんの家でも、86年は50頭中1頭も出荷できず、87年も3割だけの出来高だったそうです。スウェーデン政府から一頭いくらというふうには補償金が出ているのでなんとかはなっていますが、86年の政府支出の総額は100億円くらいになっています。

この事故のために、サミの人々はトナカイとともに暮らしていく生活を変えざるをえなくなりました。

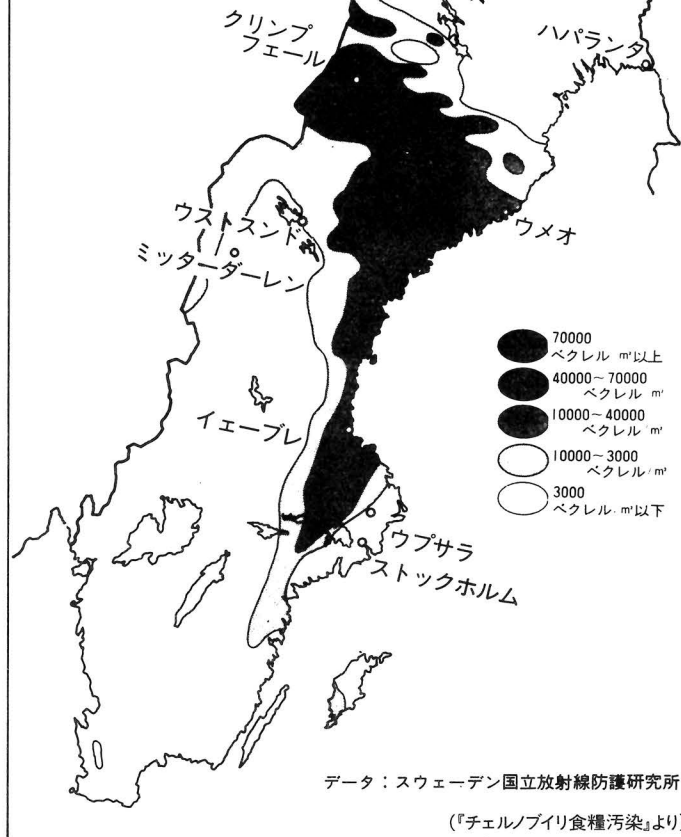
トナカイの汚染がひどいのは、トナカイが1キロあたり2万5000ベクレルという高い汚染のライツェン、別名トナカイゴケを冬場の主食にしていたからで、今はゴケを食べさせず、えさと

### ▼ラーソンさん一家は事故以来、親と子で別々の食事をとる



(「チェルノブイリ食糧汚染」より)

## スウェーデンの土壤汚染 (セシウム137,事故直後)



してペレットを与え飼育したりしています。

### 親と子で別々の食事

そして、そのひどく汚染したトナカイを食べると危険なので、ラーソンさん一家の場合、同じ食卓を囲みながら親と子が別々の食事をしているんです。

ラーソンさん一家はラーソンさんがサミ人で、奥さんは南スウェーデンからお嫁に来たスウェーデン人ですが、事故以来もう2年になりますが、子供たちにはトナカイ肉を食べさせていません。子供たちには親とは別に、ソーセージとか缶づめを食べさせています。

サミ人のみの家族や学校だと、サミの生活を続けていくという意味で、それなりにトナカイの肉を食べるんですが、それでも今まで自分の家でまかなっていたトナカイ肉を、汚染の比較的低い300キロも離れたところから買ってきて食べたりしています。

ラーソンさん一家のように現在も、持続して注意している家庭は少数です。お母さんたちは毎日、道で会うたびに何を食べようかと話しているわけで、そういうことに正直いってとに

かく疲れたというのが大方のようです。

### 人体に1万5000ベクレル

食糧汚染を通じて人間がどれくらい汚染しているかをはたして測れるのかどうか、ほんのところ半信半疑だったんです。ホールボディカウンターを使い、外界の放射線から隔離したところで、人体の放射能を測るのが普通なんです。

僕たちはシンチレーションカウンターに録音機を利用して、

テープに経時的な記録を入れ、あとでコンピュータ解析するという装置を持っていきました。

スウェーデンは花こう岩質の土壤で、自然の放射線が結構強いんです。だから外界の放射線を遮断するという意味では、ただ測定器を回すと、チェルノブイリの放射線か自然界の放射線か区別がつかない。そこでそれが区別できるスペクトルの解析装置を持って行って、それでやったわけです。

ラーソンさん一家を取材させ

てもらって、最終的には湖の上で体を測らせてもらったんですが、それは我々にとってもショックでした。湖の上だと陸から遠ざかるので、自然界の放射線が遮断できるという理屈はわかってはいたんですが、人間に測定器を近づけて針が振り切れるということは予想していなかった。長女のサラちゃんが3000ベクレルで日本人の100倍、ラーソンさんが1万5000ベクレルで実に日本人の500倍という結果が出たんです。

トナカイの収穫期は、公的には秋なんですけど、実は春にもやるんです。これは出荷するというより、自家消費あるいは身内の流通のためのもので、逆にいうと、彼らはそういうのをかなり食べるんです。これは何を意味してるのかというと、春のトナカイは冬場たんまりコケを食べていて、汚染値が相当あがってる時期なんです。キロあたり10万ベクレルぐらい汚染したトナカイがざらにいる。そういうのを食べちゃって、2年目の春

から夏にかけて、サミ人の体内汚染がひどくなっている、ウメオ大学の調査では、10万ベクレルを超える人もいます。

### 鳴りひびく測定器

今回の取材でもうひとつ驚いたのは、測定器がないと汚染が意識できないことです。1週間もいと段々と慣れてしまって、忘れてくるわけです。突然高い汚染地、ホットスポット地域に入って、じゃあ回そうかと測定器のスイッチを入れた途端にピーピー音が鳴る、その瞬間がすごく怖かった。ただ音が鳴ってるだけなんですけど……。

犬もいるし子供もいるし、みんな普通に暮らしてるんですけど、なんというのか、そこがいきなり汚染地帯であるという認識がやってきちゃうという……。そのことが体験としてショックでした。

### あらゆる食物が汚染された

トナカイの汚染がひどいんですが、ほかには川魚の汚染値が

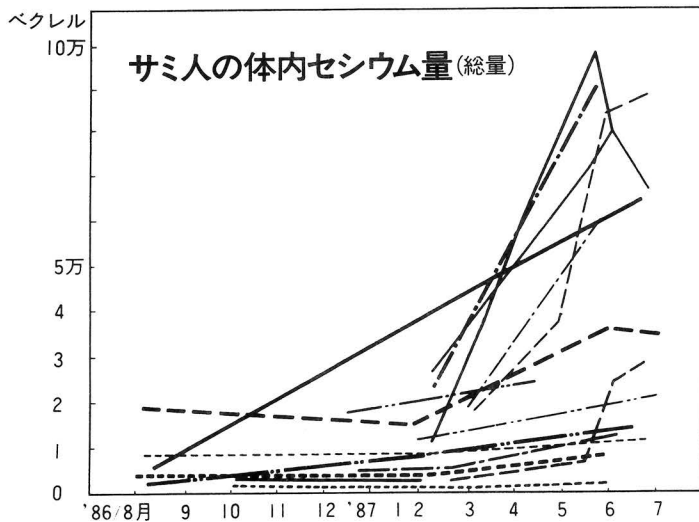
高いです。理由は単純で、山とか森に降った雨水がくだってきて、土壌中あるいは地衣類、こけとか植物類にセシウムが入ってきて、湖は閉ざされているためたまってしまう。そして湖のプランクトンなんかでセシウムを摂取して、それがまた食物連鎖で魚に入ってきてしまうというわけです。

それから木の実、キノコ類の汚染がひどいですね。残念なことにこういうものはみんな、サミ人が好きな食べ物なんです。それが食べられない。特にトナカイ肉に対する執着はすごいですね。あらゆる肉のなかで一番うまいもんだって言ってますから。

僕らには彼らの苦痛がわからないだろうと思います。少し前の世代の日本人が、いきなり「あすから米を食べちゃいけません」と言って、パンばかり食べさせられるような感じじゃないですかね。

サミ人には川魚を食べる習慣があって、非常に好むようで、これも食べられないということは大変苦痛のようです。釣ることも好きだし、それを食べることも好きだし、食べるものに関して人の世話にならないという種のパライドがあるんですね。全部セルフメードだったのに、スーパーマーケットに通ったり、魚も養殖場でペレット飼育されたものを食べなきゃならない、そういうことにかかなり抵抗があるようです。

トナカイにエサを与えて飼育するというのは、自分にとっても、トナカイにとっても非常に変な気分がする、というんです。



データ：ウメオ大学放射線物理研究室  
 (『チェルノブイリ食糧汚染』より)



遊牧の民から飼育の民になるとい  
う、大きな質的転換をせまら  
れているといえます。

### 過去のものとなった生活

ラーソンさんの奥さんの話を聞くと、スウェーデンに比べるとサミの生活には公害がなくて、車も工場もないし、子供にとってもトナカイにとっても、こんなにナチュラルでヘルシーな暮らしはなかった。でもそれが一瞬のうちに反対側に転んでしまって、ヘルシーと思っていたものが全部ダメになった。自分がかつていたところの加工食品を食べる生活に戻っちゃって、なんと表現していいかわからないおかしなことになってしまった……というわけです。

ラーソンさんも番組のなかで語っていますが、「私たちは自然とともに生きてきた。ほかの産業と比べても、少ししかエネルギーを使わない、せいぜい年に1度、トナカイを森から屠殺場に追いかむときのヘリコプターの燃料ぐらいで、それも数リットルにすぎない。それなのにこういう事故にあってしまった。何もしていない赤ん坊が、父親から突然おこられたようなもので、何もしていないのに罰を受けてる。これは不条理だ」というんです。

とてもじゃないけれど、自分に因果があってそうなったとは思えないわけです。

### サミ人として生きる道は？

彼らの悩みのより深刻なことをいえば、とにかくお嫁に出すときも、トナカイを持たせる。トナカイが財産なんです。サミ



▲サミ人の生き方を子供たちに伝えていけるのだろうか……

人として生きていくならトナカイを持つと。ラーソンさんのところは娘さんがふたりで、上の娘さんは12～13歳で、もう少しすると結婚してからもトナカイと一緒に生きるか、つまりサミ人の生活を続けるかどうかを決めていく時期になるわけです。そのところで、自分の子供たちにそれを伝えるべきかどうか悩んでる。というのも事故以来、自分の子供たちは、トナカイの肉を食べてないですから。

たとえサミのスタイルをひき継いでいっても、87年5月に、許容値が300から1500ベクレルにあがったときに、食肉としてのトナカイ肉が汚染されているというイメージが定着してしまった。仮にそれ以下のものであっても売れなくなっていく。売れない肉を、ミンクのえさにするという名目で、6000ベクレルという緩い基準のフィンランドに、国境を越えて送っているんですが、そういう事実を見ると、サミ人の文化そのものを伝えていけるのかどうか、というところまで考えざるをえないわけで

す。

そういう意味で、今回スウェーデンのラップランドを中心にヨーロッパを取材してみて感じたのは、ひとたび事故が起これば被害をこうむるのは普通の市民だし、長い食糧汚染ともつきあわざるをえないし、自分たちが享受している原発について考えなおさなくてはいけないのではないか、そういうことをヨーロッパではまじめに議論しているということですね。

(まとめ 小山貴弓)

—七沢潔さんは、NHK特集「放射能食糧汚染—チェルノブイリ2年目の秋」87年11月16日、E T V 8「チェルノブイリの教訓」88年2月3—4日を手がけたディレクター。最近ヨーロッパ取材をまとめたルポ『チェルノブイリ食糧汚染』（講談社、1200円）が出版された。ご一読を。なおこのインタビュー記事の文章上の責任は編集部にあります。



## 《発 言》

# チェルノブイリで すべてが変えられた

ポール・ドーイ(サミ人) 1988年4月23日 東京

日本に来て、皆さんとお会い  
することができ、大変うれしく  
思います。けれども、私がここ  
に来たのは、非常につらい理由  
があるからです。私が住んでい  
るスウェーデンという国は、チ  
ェルノブイリの事故で大変な被  
害を受けました。特に私が住ん  
でいるあたり、スウェーデンの  
中央部は、スウェーデンのなか  
でも特にひどく汚染されました。

私自身はラップ人で、トナカ  
イを飼育して暮らしています。  
ですから、いわゆるスウェーデ  
ン人ではありません。私の立場  
は、アメリカでしたらインディ  
アンの人たち、カナダやグリー  
ンランドのエスキモーの人たち、  
日本ではアイヌの人たちと同じ

ような位置にあたると思います。

トナカイを飼うというのは、  
自然のなかで自然とともに、自  
然によって生きることを意味し  
ます。

1986年4月28日に、私たちは  
放射能漏れがあるということ  
を聞きました。ちょうどその頃、  
わたしはトナカイとともに山の  
方に行っていました。

私たちの国には、各地に放射  
能を測定するモニタリング・ス  
テーションがありますが、まず  
フォレスマーク原発のある場所  
で、放射能が検出されました。  
ですから、最初はこのフォレス  
マーク原発から放射能が漏れて  
いると思い、原発で働いている  
人たち、そして近くに住む子供

たちを避難させ始めました。し  
かし4時間後に、これはフォレ  
スマーク原発ではなく、ソ連か  
ら来ていることがわかりました。  
そしてまもなく、それがチェル  
ノブイリの原発であることがわ  
かりました。

それ以来、サミの人たち——  
国際的にはラップ人の方が一般  
的だと思いますが、私たちは自  
分たちのことをサミと呼びます  
——私たちサミ人は、新しいこ  
とを学ぶことになりました。セ  
シウムとかベクレルとかいった  
ことです。

### トナカイの遊牧生活

私たちがトナカイとともに、  
自然のなかでどんなふうに住  
しているか、お話ししたいと思います。

写真①は、私が住んでいる家  
の窓から見える景色です。ビッグ  
シー（大きな海）と呼ばれる  
湖が、山の手前にあります。こ  
の地域全体がチェルノブイリの  
事故によってすっかり汚染され  
てしまいました。

夏になると、私たちはトナカ  
イを連れて山の上にあがってい  
きますが、これがその山の上の  
景色です（写真②）。いかにき  
れいなところであるかが、わか





▲ポール・ドイさん

っていただけだと思います。

右手に見える湖の近くに、山に  
いるとき住む家があります。  
左手に見える湖は、ここにいる  
あいだ魚をとる湖です。海でと  
れるシャケに近い種類のマスが  
とれます。左側の湖の名前は、  
サミ語では「アロファダウリ」  
というんですが、「食糧源」と  
いう意味です。夏のあいだ、こ  
こでトナカイを放牧し、その間、  
私たちはこの湖で魚を釣って暮  
らしてゆけます。

これは午前4時ごろで、生ま  
れたばかりのトナカイの耳に、  
印をつける作業を始めるところ  
です(写真③)。子供は必ず母  
親のそばにピッタリとくっつい  
ているので、どの母親からどの  
子供が生まれたかがわかります。

トナカイを飼っている人はみ  
な、父親であろうと、母親であ  
ろうと、ひとりひとり違う、耳  
に入れる印があって、耳の印を  
見ると、誰のトナカイかがわか  
ります。

このあたりの土壌の検査をす  
ると、かなり大量のセシウムが  
検出されました。事故後、最初  
の週は、それほど汚染されてい  
るとは知りませんでした。次に  
ここに行ったときは、危険だとい  
うので、子供たちはなかには



②



③



④

入れませんでした。トナカイが  
走りまわってほこりがたち、そ  
れを吸いこむことになるからで、  
放射性物質を吸いこむ危険性が  
あるためです。

冬になると、毎年屠殺を行な  
います。一頭見えますが、これ

がこの群れのリーダーのメスの  
トナカイです(写真④)。トナ  
カイは人間になつくし、教育す  
ることができます。たとえばこ  
のリーダーは、私が呼ぶとこう  
やって私のところに来るんです。  
そして、このメスのトナカイに、

その群れ全体がついてくるんです。このメスを呼ぶときの、わたしのやり方を紹介したいと思います。

イー、ウォッ

イー、ウォッ

ウォッ、ウォッ、ウォッ

ウォ ——

今のように呼ぶと、このメスが寄ってきます。

こうした白いトナカイは、特別なもので、神聖なもののみなされています。私たちの宗教は、カトリックでもプロテスタントでもなく、シャーマニズムです。白いトナカイは数が多くなく、特に大切にしています。

「ラソー」と呼ぶロープを使って、屠殺するトナカイをつか

まえている場面です（写真⑤）。

私の住んでいる地域では、だいたい2000頭のトナカイを飼っていて、毎年400～600頭を屠殺します。

トナカイは肉だけでなく、あらゆるところが活用でき、捨てることはありません。ここにあるのは角ですが（写真⑥）、アジアの方で重宝されているそうで、精力剤になるそうです。

トナカイの毛皮からは、洋服をつくります（写真⑦）。

これは私の父で（写真⑧）、とっとうれしそうに見えますが、オオヤマネコを捕まえたからなんです。オオヤマネコはトナカイを食べてしまうため、時々こうやって捕まえます。

## 出荷できなかったトナカイ

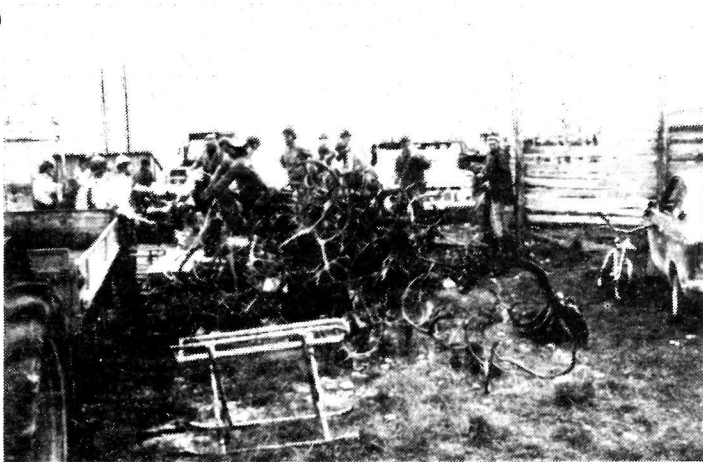
冬のあいだトナカイが食べる唯一のものが、「ライツェン」と呼ばれる特別のコケなんです。ところがこのライツェンが、チェルノブイリの事故によって特に汚染されました。このコケは寿命が20～25年と長く、セシウムをためこんでしまいます。セシウム137の半減期は30年ですから、私たちはこれから30年以上、チェルノブイリの問題を抱えていかなければなりません。

事故があった1986年の冬から87年の初めにかけて、私たちはスウェーデン全体で8万頭ほどのトナカイを屠殺しました。そのときスウェーデンでは、食品のなかの放射能の制限値がキログラムあたりセシウム137で300ベクレルに設定されていました。このトナカイの肉には、キログラムあたり8000～1万2000ベクレルほどが含まれていました（写真⑨）。このため食肉としてはこれを売ることはできませんでした。

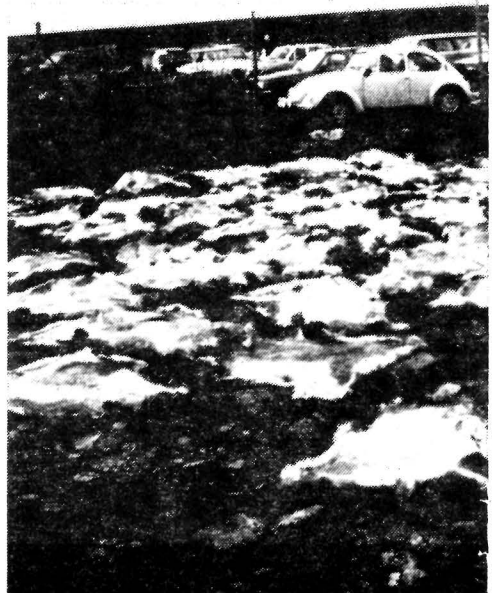
⑤



⑥



⑦



86～87年にかけての屠殺シーズンにおいて屠殺されたトナカイは8万頭。そのうち食肉として売れたのは、わずか1万2000頭でした。残りはミンクとキツネの養殖場のエサとなりました。

87年から今年にかけての屠殺数は6万頭で、そのうち食肉用として禁止されたのは2万頭でした。

制限値より高いものについては、食肉用として売れないわけですが、その分についてはスウェーデン政府が完全に保障をしてくれました。このため国は多額の出費をしました。その後1987年5月、政府はトナカイ肉に対してだけ、300ベクレルという制限値を1500ベクレルまでひき上げました。経済的な見地から、そういう処置がなされたのです。

ウメオ大学では、サミの人たちとそうではない普通の人たちの体内にある放射能値を測っています。スウェーデンの人たちは私たちとは違い、トナカイの肉や魚はそれほど食べません。

ところがサミ人のなかでもトナカイを飼っている人たちは、体内の放射能値が、1万8000ベクレルから、高い人では10万ベクレルにまでなっています。

放射能の影響が人間に出るには、10年とか20年とか、時間がかかります。ですから、直接の結果はまだ出ていませんが、将来ガンにかかる可能性はとも高いと思います。

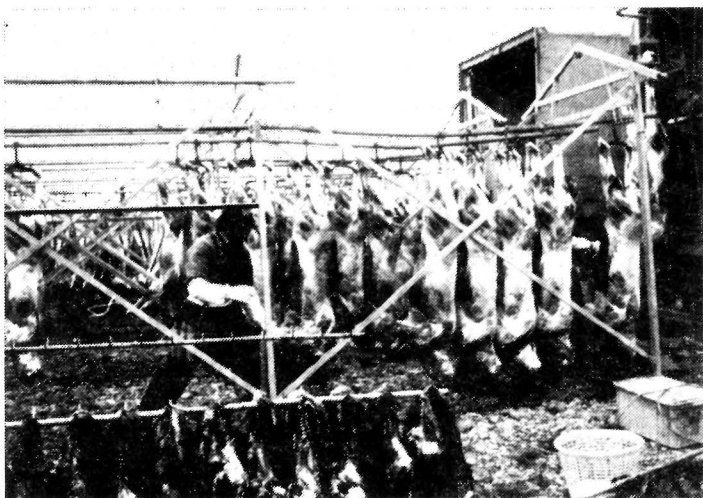
トナカイの子供のなかに奇形が生まれたりした統計や記録はありません。しかし私の国の隣りにあるノルウェーでは、87年5月に生まれた小羊の32頭に異常が認められて、なかには頭の骨がないとか、様々な奇形をも

った小羊が32頭いたと伝えられています。

トナカイでそういったことを調べるのは非常にたいへんで、トナカイは普通は自然のなかで暮らしていて、家畜のようにハッキリと把握することができません。トナカイから子供が生まれて、すぐ死んでしまっても、2～3日のうちに、オオヤマネコとかオオカミ、タカやワシがとっていつてしまうため、証拠として残らないのです。

### 破壊されたサミの文化

これまで話してきたことも、非常に恐ろしいことですが、何よりも恐ろしいのは、私たちの



文化、サミの文化というものが完全に破壊され、変えられてしまったことです。

チェルノブイリの前は、私たちは独立して暮らしていました。経済的にも独立していましたが、事故後は政府の補償金にたよる生活をせざるをえなくなりました。

今では子供たちにトナカイの肉とか燻製とか魚を、もう一切食べさせることができないのです。

たとえば魚ですが、湖からとって食べて暮らしていたわけですが、最近の検査でも魚からキロあたり1万4000ベクレルという数字がでています。

国際的には、1年間に体内に5万ベクレルまでとりこんでもいいだろうといわれます。しかし、この魚を5キロも食べてしまうと、1年分の許容量をとってしまうことになります。

ですからお店に行って、パッケージに入った魚とか、冷凍のものとか、そういったものをお金を出して買ってきて、食べなければなりません。

最近では、汚染されていない食糧をトナカイにも食べさせています。事故以来、屠殺する分については3カ月前からフェンスに囲いこみ、汚染されていない飼料などを与えています。これまではトナカイを自然の状態で遊牧していたのに、今ではあたかも農民のように囲いこんで、まるで家畜を飼っているような飼い方をしなければならなくなりました。

たしかに3カ月間、汚染されていないものを与えれば、どうかか食肉用として出荷できるぐ

らいの値にはなりません。しかしそういう飼い方自体が、今までとまったく違うことなんです。私たちは今まで、干し草とかエサなんかをわざわざ買って与えるなんてことはしてこなかった。エサはトナカイが自然のなかで勝手に食べていたのです。

トナカイが食べている茶色いものがありますが(写真⑩)、あれはペレットと呼ばれる錠剤で、今ではああいうものを買わなければなりません。

夏になると、子供たちは親につれられて山に行き、トナカイを自分たちの家庭用に1頭だけつかまえ、シーズンの最初の1頭ということで、大事にもち帰って食べました。それが本当のごちそうで、それがいい季節のはじまりの喜びだったのです。でもこれからは自分たちの子供にしてやれない。それがとても悲しいことです。

### すべての原発をとめよう

スウェーデンでは、すべての原発を2010年までにとめることになっています。原子力発電所に対する反対運動は、1960年代の初めごろから始まりました。その運動の結果、1980年に国民投票が行なわれて、多数の人が原発に対してノーという投票をしました。スウェーデンでは、2010年までには原発をすべて廃止してゆくことになります。まず1番目のものを、1995年にとめる予定です。

こうした動きは、もちろん非常によいことです。けれども、チェルノブイリで私たちが学んだのは、どんなに離れていても、どこかの原発で事故が起こった



ら、汚染されてしまうということです。チェルノブイリというのは、私が住んでいるところから1500キロも離れているんです。つまり、地球上で安全な場所はどこにもない、ということです。

ですから、私が日本の皆さんにお願いしたいのは、日本でも原発をすべてとめるように運動をして、ほんとうにとめていただきたいということです。原発をたてたり、動かすためのお金を、原発ではなく、別のエネルギーに使うってほしいと思います。

ジョイックと私たちが呼んでいるサミの歌をうたって、私の話を終わりたいと思います。伝統的に昔から受けつがれているもので、春になって南から吹く風、雪を追い払ってくれる風についての歌です。〈ジョイック省略〉

(まとめ 小山貴弓)

——ポール・ドイさん(49歳)は中部スウェーデンのウストサンドから西に入ったオース近郊に住む。88年4月の「原発とめよう1万人行動」に来日し、サミの現状を訴えた。ここでは4月23日の総評会館での発言を、質疑応答も含めてまとめた。

## 《資料》

# スウェーデンのサミ(ラップ)人

スウェーデン協会

『Fact Sheets on Sweden』1986年5月発行より抄訳

●訳・上田 昌文●

サミ(ラップ)人は、古代からスウェーデンに居住している。紀元前から、さまざまな時期にさまざまな集団をなして東から移動してきて、南フィンランド、北極海沿岸、スカンジナビア半島に定着した。彼らがスウェーデンの北端に居を定めたのは非常に昔のことで、彼らがそこを自分たちの土地とみなすのは自然である。

サミ人は現在、スカンジナビア半島の北極圏全域、ノルウェ

ーとスウェーデン国境ぞいの山岳地帯からスウェーデンのダラルナ(Dalarna)地方の最北部にかけてに住んでいる。

サミ人は、もともと狩猟と漁労の民だった。彼らの狩猟文化の中心に野性のトナカイの狩猟があった。その後、野性のトナカイを飼いならすようになり、さまざまな形態のトナカイの遊牧が発達した。これには1000年以上がかかっている。

した。ひとつは、より定住型の遊牧で、トナカイを森林のなかでだけ移動させるもの。他方は、山岳遊牧として知られる、より移動型で地理的にかなりの長距離を往来するものである。

トナカイの遊牧を行なうサミ人は、サミ語で *čearru* と呼ぶ共同体「サミ村」をつくっている。この共同体は、行政と経済の単位であるとともに、遊牧している地域の広がりをもさし、トナカイ遊牧にあたる人々の一種の相互扶助社会である。遊牧地域は、大きく3つに分けられる。夏の高原放牧地、春と秋の中高地および隣接するシラカバ林の放牧地、そして冬の針葉樹林の放牧地である。

中高地はトナカイが交尾・出産するところで、サミ人はそこに、一番長く滞在する野営地(*visten*)を徐々に築いてきた。そして移住しながらの遊牧から、次第に低地にかけて定住するものが増えてきた。一方、よりはっきりと定住に転換するものは、森林地帯(冬の放牧地)に住居を構えた。近代的な社会的サービスを受けやすいからである。現在では、一族もるとも移動していくタイプの遊牧は、ほぼ姿を消した。家族全員ではなく、

## トナカイの遊牧

サミ人の人口は4万から5万人と推定され、そのうち1万5000人から1万7000人がスウェーデンに住んでいる。しかし、サミ人だと同定できる単一の指標があるわけではない。トナカイの遊牧、血縁関係、言語などはそれぞれが指標となりえるが、どの指標を用いても総人口に違いがでてくる。スウェーデンのサミ人についていえば、生計を立てるために直接あるいは間接にトナカイの遊牧に従事しているのは、約2500人(600から700家族)にすぎない。

したがって多くのサミ人は、他の手段で生計を立てている。

彼らはサミ人の居住地の内外でさまざまな職業についている。少数民族サミ人としてのアイデンティティを強く維持するものから、スウェーデン人と完全に同化してしまったものまで、サミ人とサミ文化との結びつきには大きな幅がある。しかし近年、サミ人としての自己意識の高揚がみられる。その背景には、スウェーデン政府が少数民族としてのサミ人を保護する政策をとっていることや、少数民族問題全般に対する国際的な関心の高まりがあげられる。

スウェーデンでは2つの異なった形態のトナカイ遊牧が発達

トナカイの牧夫として実際にトナカイを相手にするものだけが遊牧を行なっている。飛行機、自動車、スノースクーターといった近代的な交通手段も、トナカイの遊牧に用いられている。

1920年代まではいわゆる集約遊牧が一般的だった。小さなトナカイの群れをかなり入念に飼いならすのがその特徴で、家族全員が群れとともに移動した。今日では粗放遊牧がほぼ完全に取ってかわった。つまり、トナカイを大きな群れで飼い、常時監視するのではなく、冬のあいだだけ1カ所に集めておくやり方である。最近では、トナカイはもっぱら肉の生産のために飼われている。

最も重要な問題のひとつは、トナカイの遊牧がどれくらい儲かる仕事になるのかということだ。スウェーデンには現在約25万頭のトナカイがいる。家族を養っていくのに必要な平均収入から考えると、一家族当たり500頭の群れを持っていなければならない。しかし、そんなに多くのトナカイを持っているものは、ほとんどいない。したがってトナカイ遊牧の収入だけでは食べていけず、人口の少ない地域のため農業収入もわずかなので、狩猟、漁業、手工芸、それに小規模だけれど観光、といった副業からの収入が重要になっている。最南域のベスターボテン地方やイエムトランド地方では、トナカイ遊牧は儲かる仕事だとみなされている。

### トナカイ遊牧法

1971年にトナカイ遊牧法が、トナカイ遊牧の経済的状況の改

善などを目的にして制定された。この法律は、スウェーデンにおけるトナカイ遊牧業を規制し、適用される法規のわくぐみを示したものである。

この法律では、トナカイ遊牧はサミ人の特権として認められる一方、「公共の福祉の重要性にかんがみ」必要とされる場合は、政府がしかるべき地域のトナカイ遊牧を閉鎖するための議案を提出する権限をもつとの規定がある。狩猟や漁業に関しても同様である。

トナカイの遊牧地が外部から

## 教育

サミ人の子供たちは、国が財政援助している居住地の学校に通うか、7つある国立の移動式学校のひとつに通うかして、9年間の義務教育を受けることができる。移動式学校の教育目標は、他の小中学校と同じだが、サミ人の言語と文化が教えられるという点が違っている。

サミ人のための特別の学校に通わない子供たちも、母国語とサミの文化を学べるようになっている。これは「母国語プログラム」にもとづくもので、母国語がスウェーデン語ではないスウェーデンの学童全員に対して、それぞれの母国語をスウェーデン語に加えて教えている。

サミ人に対する公教育は、サミ人をキリスト教化させようとする運動の一環として、17世紀初期に始まった。それは同時に、スウェーデンが北部の領土権を主張する運動でもあった。

1942年よりサミ人のための特別な民族大学が開校されている。

の侵害を受けつつけている状況のなかで、こうした法律についての論争がつづいている。その論争は、サミ人と非サミ人の将来の関係を定めるうえで、サミ人の発言権をどう保証していくかという難しい問題をも含んでいる。高速道路の増加、水力利用計画の拡張、のしかかる観光開発、森林利用の増大、そしてある種の食肉動物の法的保護…こうしたことすべてに、トナカイを遊牧するサミ人は、日に日に適応を迫られている。

十分な学校教育を受けることができなかつた年長の世代が、いくらでもその補いができるようにするという目的をもち、非サミ人の学生と合同授業を行なったり、サミ文化に関する特別コースを設置したりしている。

北欧諸国にまたがるサミ人を対象に、「北欧サミ協会」がノ





ルウェー北部のコウタケーノに  
1974年に設けられ、研究、公共

情報サービス、教育関係の仕事  
を行なっている。

## 文化と言語

サミ人の文化で、最近注目されているのは、手工芸である。サミの家庭用手工芸品は、おみやげ品として扱われるようになり、大切な副収入源となっている。新しい装飾技法を開発している人もおり、ある意味ではサミ手工芸の伝統の復活といえる。「サミ文化協会」は、展覧会を開くなどして、サミの伝統文化の保存につとめている。

サミ人の言語は、フィン・ウゴル語族に属し、大きく3つの方言つまり亜語族に分かれている。中央・北サミ語（一番広く話される）、東サミ語、南サミ語である。南サミ語は、中央ノルウェーおよび中央スウェーデンの北部で、中央・北サミ語は、ノルウェーとスウェーデンの北よりの地域とフィンランド最北部で、東サミ語は、東部

フィンランドのイナリ湖からソ連のコラ半島にかけての地域で話されている。

言語の問題は、当然のことながら重要である。サミ人の言語をいかに保存し、復活させていくかに関心がはらわれてきた。語学のコースは年々増えている。これまで出版された文学作品の大部分が北サミ語（サミ人のほぼ75%が話す）で書かれ、スウェーデンとノルウェーのサミ人が採用している表記法にもとづいている。

サミ人の文学作品は、多くはない。他の極地民族と同様、「口承文芸」が中心で、この口承の伝統は yoiking という一種の

歌のかたちをとっている。ときにはおとしめられたりもしたが、この芸術は、最近新たな復活をとげている。

文学の領域では、1910年のヨハン・トゥリの『サミ人物語』や1969年のアンドリアス・ラバの『アンタ』が古典に属し、エリック・ニルソンやマルガレッタ・サリの作品がサミ文学の新しい出発点になった。

サミ文化にとって、たとえば1975年にカナダで開かれた先住少数民族会議などで、他の少数民族との接触が生まれたことは、新しい契機となった。カナダ会議以来、サミ人はいくつかの国際会議に代表を送っている。スウェーデンのサミ人は「北方サミ協議会」を通して「世界先住民協議会」のメンバーとなっている。

### サミ(ラップ)人の呼称について

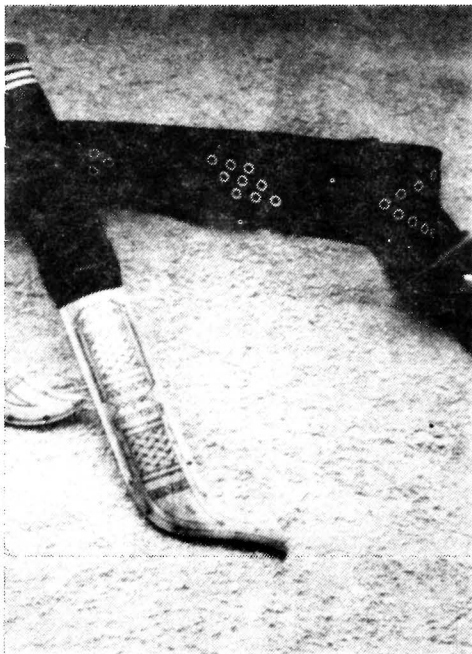
「ラップ」Lapp というのは現地語ではない。スカンジナビア3国では、彼らが自らを呼ぶときの現地語 *sámme* あるいはその方言を用いるようになってきた。スウェーデンとノルウェーでは *same* が、フィンランドでは *saamelainen* がよく使われる。現地語使用に変わってきたのは、サミ人からの働きかけによるもので、

「ラップ」という言葉が彼らにとって不快な含みをもつからである。

現地語に対応する適切な英語の言葉をつくらうと試みられるなかで、*Saami* と *Sami* がしだいに受け入れられるようになってきた。後者の「サミ」は、彼らの機関や組織が英語に翻訳されるときによく用いられている。

◀ 伝統的な模様をきざんだ  
ナイフとベルト

— Swedish Institute の  
『Fact Sheets on Sweden  
— The Lapps in Sweden』  
(1986年5月発行)より抄訳  
し、まとめた。



ドキュメンタリー映画

# 脅威

HOTET  
UHKKÁDUS

## 日本語版台本

1987年 スウェーデン ステファン・ジャール監督作品

日本語版製作：反核パシフィックセンター東京

字幕

(暗黒の画面のなかテーマ音楽が続く。かすかに鳥の鳴き声が聞こえる)

1986年4月26日、土曜日。スウェーデンに春が訪れようとしていた。その日、チェルノブイリ原発で事故が起こった。それはヨーロッパに数多くある原子力発電所のたったひとつで起きた出来事だった。暖かい春風が、スカンジナビアにむかって吹き、スウェーデンは、どこの国よりも多く死の灰をあびた。

私は映画製作のためノールランドにいた。しかし計画を変えざるをえなくなった。そしてこの映画をつくった。このような映画をつくることになるとは、思いもよらぬことだった。

タイトル

HOTET — UHKKÁDUS (脅威)

(フクロウや森の動物たち。一面の雪原、雪に残る動物の足跡)

ナレーション

初雪が降ったばかりだった。

湖に氷が張り始めていた。

長い冬が始まろうとしていた。

10月の初め

ここはスウェーデンの北のはずれ。

(山なみを背景に列車が走りぬける)

近代社会を思い起こすものといえば、鉄道、そしてノルウェーにつづくハイウェイがある。ここには、ヨーロッパでも唯一、広大な原野が残されている。

ナレーション

(凍りついた湖をトナカイが移動してゆく。雄大な自然。ヘリコプターの音が聞こえてくる)

湖のむこうがカトゥウォマ地方。

(雪に埋もれたトナカイの死骸。薄す明かりのなかヘリコプターが近づいてくる。ヘリコプターは何か“奇妙な荷物”を下げている。場面は変わって、家のなかにともるランプ。ほの暗い室内に老人の顔がうかぶ。リリムールが木を削っている。老人が歌う)



老人の歌の歌詞  
Johannes Svonni

私のいちばん気に入ったトナカイをつれてゆきたいと思った。でもみつからないので、別のをつれていった。

カレサド教会村についたとき、わたしがみたものは……

そう私のいとしい人だった。教会の階段を、ウェディングドレスを着て昇っていった。

私はソリをまわして、フィンランドの雪深い原野にむかった。

コウタケノにむかって、昔なじみの友達にあうために。

だがコウタケノでは、本当に恐ろしいことのであった。

青春時代のいとしい人が、ほかのやつと結婚するんだ。

もう一度ソリをまわして、家路にむかった。

若者よ、よくお聞き。私のようなみじめな道をたどらないように。

子供たちの運命など、世界はなにかまってくれないのだ。

(氷をわり、水を汲むリリムール。家に飾られた一家の古い写真が、ラップの人々の以前の生活をしのばせる。ユンが皮をなめす作業をはじめ)

ラウシ・ユン  
Lars Jon Allas

子供のときから言われてきたのは、自然と共存し、自然を破壊しないということでした。自然は人間が預かっているものなのです。

たとえば子供が遊んでいるとき、あまり乱暴だと、もっと静かに、おとなしく遊びなさい。そうしないと石になってしまうよって言われます。

自然に対して無謀なことをしないように教わりました。大きな穴を掘ったり、叫んだり、金切り声をあげたりして、自然を脅かさないようにと習ってきたので



す。スキーをするのはかまいません。自然のことですから。でも荒らすのは、自然に反しています。そんなことをすれば、罰をうけ、石になってしまうよと言われてきました。

皆そうなることを恐れ、しつけられてきたのです。これが私たちの価値感です。生活のすべてが、こうした価値感にもとづいています。

私たちは自分の両親とだけ暮らし、育ってきたのではなく、集団のなかで暮らしてきました。みんなが子供たちに教えるのです。あまり乱暴がすぎると、ひどいめにあうよと……。

でも森のイチゴをつむなとか、魚をとってはいけないとか、そんなことは言いません。大人たちは、そういうことはやっごらんと、すすめたのです。ただ心にとめておきなさい。あまり欲張ると、自然を荒らすことになるんだよ。魚をとるときも、みんなのやり方で、いくつかの網でね……。つまり、樺の木の根で魚でとるのなら、それは自然にかなったやり方だ。だから、おまえたちもそうするようにしなさいと。

自然が与えてくれるものを使って、ぜいたくや裕福な生活をしないようにと話してきました。

(雪道を遊ぶ犬と子供)

だから、私たちラップ人の住むノールランドは、自然が汚されていないのです。ラップ人は、ここに何世紀ものあいだ住んできましたが、それで自然が荒らされた跡はひとつもありません。自然をあずかりものとして、私たちは生きてきたのです。

ナレーション

彼の名はラウシ・ユン。私のためにスウェーデン語で話してくれた。ラップ語が彼らのことばだ。

(毛皮をぬい何かつくっている)

リリムールとラウシ・ユンは、秋のあいだタルマの村人とともにここで暮らす。

(幼い子供たちにシャケをさばいてみせる村人。シャケを加工している人々。

風景のなかに家がみえる)

ナレーション

やがてトナカイを低地の森林地帯につれてゆく時期になる。そこが、冬のあいだの牧草地になる。

(湖ごしの雄大な風景)

ここには電気はない。  
水道も、道路もない。  
私はここに、ヘリコプターで訪れた。

(小屋のなかでストーブが燃えている。ユンは木を削り、トナカイの皮をなめす作業をしている。リリムールは台所で、パンケーキのようなものを焼く準備にかかる。削った木を皮の裏に一枚一枚はっていく)

ラウス・ユン

この木くずを並べるとき、重ねあったり、触れあわないように注意します。少しあいだをあけてはっていきます。

(皮をなめす作業。オープンからは次々とパンケーキが焼きあがる。うす暗い画面に変わる。暗やみのなかをヘリコプターが近づいてくる。ヘリコプターにつり下げられているのがトナカイの死骸らしいのがわかる)

リリムール  
Lillemor Baer

そんなに危険ではないと、はじめは思うかもしれませんが。ここで以前と変わらない生活ができるのではないかって……。

でも、ここに住んでみれば、すぐに何か違ったものを感じるはずです。何を話していても、まったく違った気配。それは……。



なんというのか、すべての終わりがおとずれるような、でもそれを信じたくないような……。

これはウソなんだと願ったり……。

ユン

ええ、恐ろしいことです。こんなことを許してはならないと、みんなが言うべきです。すべての原子力発電所を閉鎖すべきです。すべてをです。

(ヘリコプターから降ろされるトナカイの死骸。夏の風景に変わる。遠く頂きに雪が残る山々。夏の野営地)

ナレーション

ここで、数カ月前に話を戻そう。

はじめてここを訪れたのは去年の夏のことだった。

タルマのラップ人は、ノルウェーとの国境にあるここで、夏の野営を行なう。

(野営地。小屋の前で丸太を割る人)

ここから数千キロ離れたところで、ひとつの原子力発電所が爆発した。

ヨーロッパでは、この出来事を大惨事と呼んでいる。しかしここでは、それについて考える暇すらない。今年生まれたトナカイの耳にマークを付ける季節だからだ。

(丘から雪崩のように降りてくるトナカイの群れ。犬やオートバイを使ってトナカイを集めている。平地に追いこまれたトナカイが円陣をえがいていく。投げ縄で一頭、一頭トナカイをつかまえ、耳の一部を切りとり印をつけてゆく人々。リリムールの姿もみえる。少年も、ようやく歩くような幼い子供も、大人に混じって投げ縄を投じている)



私たちは自然を信じていますが、そうでないものは信じられません。原子力発電所は自然の産物ではありません。

ではエネルギーはどこから得たらいいのか？

実際そんなにエネルギーが必要なんですか？ たいがいは、ぜいたくな消費に使われているんです。

ここには電気も、道路もありません。そんな私たちがなぜ、世界の進歩とか、発展とかの犠牲にならなくてはならないのですか!!

関係もないぜいたく品のために、まったく罪のない人々が苦しめられているのです。私たちの文化全体が根底からくつがえされてしまったのです。

(トナカイの群れのなかでマーク付けをするおばさんやおじさん)

文化というのは、人々の生活様式、考え方、そして価値感です。でもこんなことが起こると、価値感が変わってしまいます。

ユン

ユン

つまり、物事をお金で判断するようになります。トナカイを今までのように大切にすることはなくなるかもしれません。

まず第一に、動物たちのことを考えなくてはなりません。その次が自分たちのこと。そして、まわりの命ないもの。自分自身のことは、二の次です。これが昔からのラップ人の価値観なのです。

たとえば犬や家畜は、人間を助けてくれます。こんな話があります。犬がラップ人のところにやってきて、助けと食べ物を求めてきました。ラップ人は聞きました。「お返しは何ですか？」

犬は言いました。「私は森でトナカイの世話をすることができる。毎日の食べ物だけでいい」

「そして私を訓練しなさい。そうすれば、あなたを手伝える。でも私を手荒にあつかわないでくれ」

「手荒にしないこと、これが大事だ。私が年をとったら、私のめんどうをみてくれ。死にかけていたら、この世の外へつれだしてほしい。そのまま私を生かしておくのは酷だ」

トナカイについても同じです。トナカイにとって一番よいことをしようとします。動物たちに残酷なことをするのは、まちがいです。

あらゆる方法で、めんどうをみます。トナカイをよい牧草地につれていったり、トナカイが山に行きたがれば、いっしょに行きます。冬になれば、森につれて行きます。

でもチェルノブイリ事故のあとでは、セシウムのことを考えに入れなくてはなりません。トナカイは、そんなことわかるわけがないので、トナカイの意に反して働かなくてはならないのです。

トナカイは、森においてゆく時期が、自分でわかります。でも、セシウムのこととは知るわけがありません。

こうして違った価値感が生まれます。それは私たちだけでなく、トナカイといっしょに働いているみんなが、そして未来の世代までが、その影響を受けることになります。

私たちは違った価値感をもつようになり、動物を違う角度から見るようになるのです。

動物を動物として見るのが一番よいのですが、これからは、生産力を持つ商品として見るようになるでしょう。

それは、正しいことではないし、そうなってはなりません。自然の恩恵を受けながら、自然に反して生きることになります。

それは、まさに地獄です。自然と共存することと、反逆することとが、両立できるはずがないのです。しばらくはできたとしても、長くはつづきません。

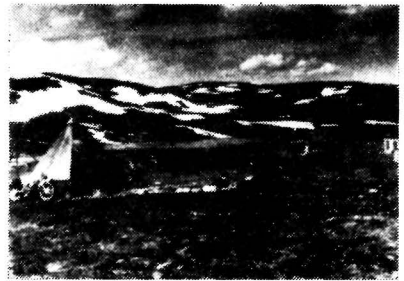
トナカイを飼うことは、スウェーデンの歴史のなかで、大昔から続けられてき

たことで、いつから始められたのか、だれも知りません。そして私たちは、ヨーロッパの価値観や文化とは別の、私たち独自の文化をつくりあげてきたのです。

もし金もうけをしたいなら、トナカイを飼う生活なんてしないほうがいいでしょう。ほかの方法で金もうけをすればいいんです。

私たちのやり方というのは、職業ではなく、生活です。生き方そのものなのです。

(トナカイの群れのシルエット。夏の野营地。小屋のなかのリリムールとラウシ・ユン。リリムールがマーク付けで切りとったトナカイの耳を糸にとおしている。風景が木々の紅葉した山並みに変わる。原野に通る一本の道。車によって人々が集まってくる。あいさつをかわす人々)



ナレーション

9月。

とさつの季節。

人々は、遠くから、近くから、ここにやってくる。

(トラックが到着する。集まってきた人々の表情は華やいている)

ナレーション

私たちは、ラウシ・ユンといっしょに、タルマの北にあるサーリウォーマ村にやってきた。

トナカイとともに働いてきた成果が、利益となってあらわれるときだ。

(トナカイの群れ。成長したトナカイを投げ縄で一頭づつとらえて、柵のわきのと殺場につれこむ。民族衣装の女性たち。子供も大人もこの晴れがましい作業を見守る)



リリムール

苦しい年もたびたびありました。でもトナカイで、なんとか生計をたてることができました。魚をとることもできたし…。

少なくとも以前は、トナカイを失ったとしても、ほかの方法がありました。どこかの土地に定住して農業をしたり、フ





イヨルドにおりていって漁業をしたり…  
…。でも、今では選択の余地がありません。魚はダメになってしまいました。最悪です。セシウムのレベルが、あがる一方なのです。



このままでは、生活してゆくすべがありません。まったくないのです。食べてゆくためには、街に出てゆくしかありません。トナカイを飼ったり、狩りや魚とりといった自然とともにする仕事は、もう何もないのです。

今やトナカイだけでなく、何もかもがダメになってしまいました。ここで農業をはじめめることもできません。魚をとって暮らしていくといったって、無意味なんです。

15年たてば、トナカイのセシウム量が平常にもどると、政府はいいます。でも魚とりで暮らしたくても、一匹の魚を売ることもできないのです。

すべてが奪われました。昔からあった自然の豊かさは、みな失なわれてしまったのです。何も残っていません。

苦しい年には、多くの人が出稼ぎに出ました。そしてよくなると、帰ってきました。

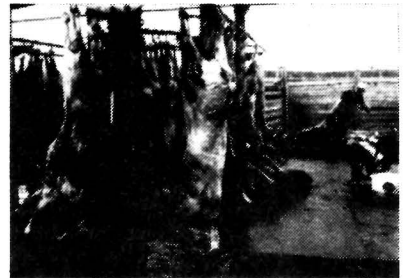
少なくとも、食べるものはありました。でも今や、それすらないのです。

ほかにもいろいろなことが起きています。森の木を切り倒すとか、川をせきとめ、ダムをつくるとか……。そういったことが進んでいます。それはジワジワと近づいています。

冬のあいだじゅう、森の木が切られるのを不安に感じています。たったひと冬、森の木を切りたおしただけでも、自然は大きく変わります。

でもそれは、一夜にして起こることではありません。しかし今回の出来事はちがいます。急におそってきたことで、思いもよらなかったことです。すべてが奪い去られていきました。どうすることもできません。

(トナカイのと殺場。と殺が終り、人々はその日の“収獲”の一部をもって帰路につく。と殺場に残って後始末をする人々)



ナレーション

いま、確かに言えることは、セシウム、ストロンチウム、プルトニウムを含んだ放射能の雲が、ここラップランドにもやってきたことだ。

当局は、ただちに最大許容量を決めた。事故後、最初にと殺された肉の87%が、

廃棄処分となった。最後にと殺されたものは、すべてが廃棄処分だった。

ラップ文化の土台であるトナカイが、放射性廃棄物と化してしまったのだ。

(景色が冬に変わる。雪に埋もれたオートバイやトラクター。部屋のなかでは  
リリムールが母親とトナカイの皮でブーツをつくっている。昔の写真を手に  
するリリムール)

リリムール

深刻です。

はじめはあまり気にしていませんでした。日々の生活の大切な部分を失なって  
しまったのに……。

魚釣りなんか、もう二度とできないのです。

冬のたくわえのために、秋に魚をとることも、今では思い出になってしまいま  
した。

すべてが思い出だけになるなんて……とても信じられません。

去年、魚をとっていたときに、それが最後だとわかっていたなら……。

現実のこととは思えません。

私たち姉妹や母にとって、冬にそなえて、魚をとるのは、まかされた仕事だっ  
たのです。

何というのか、それは楽しみでした。

すべてを自分たちでまかなっていました。天気は時々荒れましたが、それは秋  
の特徴です。

嵐や雪で、きびしいのですが、やらなくてはならないことだし、やりがいのあ  
ることでした。

去年の魚とりの時期は、ひどい天気でした。

網を持ちだすだけでも、まるで戦争でした。

母がボートをこいでいましたが、ボートを支えるのが精いっぱい、それは今  
でも目にうかびます。

あれが最後だなんて……。

そう、いっしょに魚とりに行ける最後だと知っていたら……。

(ヘリコプターが飛びたってゆく)

母は、この春で70才になります。

みんな元気です。そうみんな……。

でもいつまで元気でいられるのでしょうか。

(ヘリコプターの音が大きくなって来る。トナカイを追う2機のヘリコプター)

ナレーション

当局はヘリコプターを提供し、「放射能レベルが上がらないうちに殺せるだけのトナカイを殺せ」と命じた。

(トナカイを追うヘリコプター。ユンやリムールは窓ぎわから外をうかがう。

トナカイは円陣をえがきながら柵のなかに入れられていく)

ユン

トナカイの肉にセシウムが何ベクレルあるのかなんて、関心ありません。

そんなことは重要ではない。

これは大惨事なのです。

それならば、大惨事として対処すべきです。

これは人間がひき起こしたことです。

当局はセシウムの値が高ければ大惨事だというけれど、そうでしょうか。

許容量をほんの少し超えただけなら惨事ではない、とでもいうのですか!

惨事なのか、そうではないのかのどちらかしかありません。

(作業をする人々。と殺されたトナカイがたばねられ、ヘリコプターでつり上げられ、運ばれてゆく)



ナレーション

ラップの人々は、トナカイなしに生きることにはできない。

そして、私たちもみな、自然を離れて暮らすことはできない。

大地を離れ、自然の調和とバランスを無視して生きようとしても、それはできないことではない。

(暗い雲間を飛ぶヘリコプター。雲の切れ間にさしかかるとヘリコプターの、“奇妙な荷物”がシルエットになっとうかぶ)

ナレーション

ヨーロッパのたったひとつの原子力発電所からの雲が、すべてを変えた。

すべてが汚染された。

どこへ行っても、

どんな小さな穴のなかにも、

細胞のひとつひとつにも、放射能は入りこんだ。

汚されていないものは、残っていない。

汚れのない大自然は、もはやどこにもないのだ。

( 遠くの山々に月がうかぶ。ランプの明かりのもとで老人が歌う )

1. 人々は町に住む楽しさを語る。  
町に行けば、解決する。  
それが今のやり方だと。  
だからおれは毎晩歌う。
2. ネオンの光を燃えさかるオーロラに変えよう。  
町のビルを海辺の小屋に変えよう。  
町の喧騒を捨て、いなかの静かな暮らしに戻ろう。
3. 人々は町に向かい、大地を捨てる。  
一生懸命働けば、いつかいなかに土地が買えるだろう。  
だからオレはこんなふうに歌う。
4. ネオンの光を燃えさかるオーロラに変えよう。  
町のビルを海辺の小屋に変えよう。  
町の喧騒を捨て、いなかの静かな暮らしに戻ろう。

( ヘリコプターにつりさげられたトナカイが遠ざかっていく。画面はフェイドアウトし、テーマ音楽のみが暗黒のなかに長く続く )

監督・製作 Stefan Jarl 1987年 4月  
撮影 Per Källberg  
音楽 Ulf Dageby  
編集 Anette Lykke Lundberg  
録音 Per Carlsson, Bengt Andersson

『 脅 威 』 日本語版 1988年 3月

ナレーション 那波一寿  
声の出演 竹内正男<ラウシ・ユン>  
吉田珠美<リリムール>  
翻訳 小林ときわ、清水靖子  
台本 吉川繁、荒川俊児  
制作協力 OH企画、呉徳洙、清水千恵子  
セントラル録音、トルバドール音楽事務所、東京現像所  
配給 反核パシフィックセンター東京

日本語版製作 反核パシフィックセンター東京

〒 113 東京都文京区向丘 1-3-7 自主講座内  
☎ 03 ( 815 ) 1648

ドキュメンタリー映画

# PACIFIC パシフィック

Paradise in Pain

(原題訳:太平洋-傷ついた楽園)

1986年 オランダ オットー・シャーマン監督 ロルフ・オーセル製作  
日本語版製作:反核パシフィックセンター東京  
16ミリ(マグネット音声) 60分 カラー 貸出料1回2万円

きらめく太陽の下、浜辺で日光浴を楽しむ旅行者たち。ニューカレドニアの首都ヌーメアでの風景。しかしそこでは、観光業者がふりまくきらびやかな「楽園」のイメージとはうらはらに、フランスの植民地支配からの独立をめざしてたたかう先住民、カナキーの人々が生々しいたたかいを続けています。映画はニューカレドニア、ハワイ、ペラウ、マーシャルを取材。大国によって伝統文化を破壊され、生存の基盤をも奪われつつある人々の生の声と、それらに抗する人々の息吹を伝えます。ちまたに氾濫する観光パンフレットからは、まったく知ることのできない太平洋の姿を、是非知ってください。



ドキュメンタリー映画

# 半減期 HALF LIFE ハーフライフ

1985年 オーストラリア デニス・オロウク監督 Dennis O'Rourke  
日本語版製作:反核パシフィックセンター東京  
16ミリ(マグネット音声) 1時間20分 カラー 貸出料1回3万円

86年チェルノブイリ原発事故が起こったとき、マーシャル諸島ロンゲラップ環礁のある住民は、暗い表情になってこう語ったといひます。「放射能をあびた人は、10年たったら私たちと同じように甲状腺異常になるね」。

マーシャル諸島の人々が、米国の核実験で死の灰をあびたのは、今から30年あまり前のことでした。ところが、放射能はじわりじわりと人々の体をむしばみ、今もなお甲状腺障害やガン、白血病などの病気が絶えることなく続いています。それどころか、子供たちの世代にまで病気が広がるにおよんで、ロンゲラップの人々は85年5月、自ら放射能で汚染さ

れた故郷を離れたのでした。

「ハーフライフ」とは、放射能の半減期を意味する英語ですが、「半分の命」とも受けとれる内容です。

映画は、こうした“被ばく難民”を生みだした米国の核実験の実態と放射能被害の実像を、島の人々の語りとともに当時の記録フィルムをもとに描いています。核をもつ側の人々の傲慢な姿、それによって被害を受けた人々の苦しみと人間としての尊厳が、くどい説明なしに描きだされています。

ラストシーン近くのおばあさんの言葉を、ぜひみなさんにも聞いてほしいと思います。



映画パンフレット

## ハーフライフ

頒価400円(送料50円)

写真集

## グッドバイロンゲラップ

豊崎博光(築地書館)

1500円(送料250円)

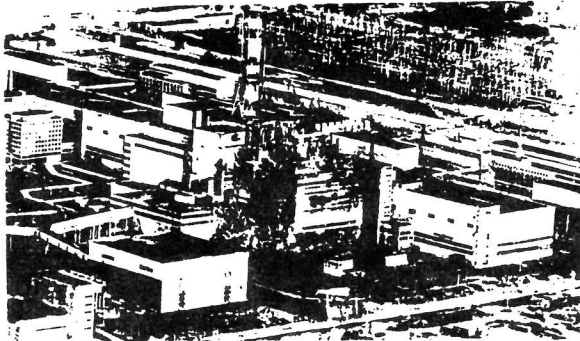
●フィルム貸し出しの問い合わせ先●.....  
反核パシフィックセンター東京 ☎03(815)1648 〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内

映画

# ドキュメント チェルノブイリ

改訂版  
ビデオも  
完成!!

1988年7月改訂版 解説:高木仁三郎 企画:原発とめよう!東京行動  
制作:反核パシフィックセンター東京 制作協力:OH企画  
16ミリ 22分 貸出料1回1万円(送料実費) ビデオ頒価3500円(送料350円)



原子炉建屋の屋上には、砕け、吹きとばされた黒鉛が一面につもっている。除染作業にあたる人々は、まさに軽装で分単位、秒単位の作業をしている。カメラのとらえた場面を見ていると自分自身が被ばくをしていくような錯覚におちいる。チェルノブイリ原発事故の映像を、日本において再構成し、解説したもの。

ドキュメンタリー映画

## 原発切抜帖

1980年 青林舎作品 企画・演出:土本典昭  
16ミリ 45分 カラー 貸出料1回1万円(送料実費)

時代の証言者としての新聞をとおりて、広島から現在の原発大国ニッポンまでを小沢昭一さんの語りでたどる。

★スライド★

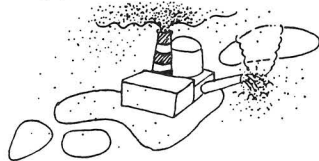
### それでも 原子力発電を 選びますか?

原発に関する入門スライドをつくりました。チェルノブイリ原発事故について、放射能について、核のゴミについてなど、原発のこわさと原発はいらないということを、わかりやすく説明。好評のリーフレットのスライド版。

80コマ、30分(ナレーション・カセット) 頒価1セット2万円、貸出料1回3000円

【内容】

1. 国境を越えた放射能
2. からだをむしばむ放射能
3. 日本の原発はだいじょうぶか?
4. たまりつづける核のゴミ
5. 原発はいらない
6. 原発はとめられる



カラースライド

(製作:反核パシフィックセンター東京)

#### 原子力——その隠された実態

米国の海洋投棄で放射能が漏れ出したドラム缶の水中写真など、生々しいカラースライドが原発の恐怖を写し出す。82コマ約40分 頒価2万円、貸出料1回5000円

#### 第5福竜丸のむこう側

マーシャル諸島の被爆者

米国の核実験場とされたマーシャル諸島からの報告  
96コマ40分 貸出料1回5000円

#### 核のゴミ野放し法案をつぶそう

原子炉等規制法改定ここが問題だ

原子炉等規制法改定の危険性について知ってほしいと製作したもの。86年のこの法律改定は、日本の核廃棄物政策を根底から大転換させる危険きわまりないものであった。

70コマ20分 頒価1万8000円、貸出料1回3000円



月報

反核太平洋

# パシフィカ

頒価400円(送料50円)  
年間定期購読料4000円(送料こみ)

非核憲法を制定したベラウパールの人々、放射能被害に苦しむマーシャル諸島の人々、核開発の踏み台にされてきた太平洋の人々は、いま声をあげ、反核独立太平洋をめざす大きなうねりをつくりだしています。月報『パシフィカ』は、こうしたアジア太平洋民衆の声をたたくいを伝え、核のない太平洋をめざす私たちの活動の報告などを載せた運動誌・情報誌です。〈連絡いただければ、見本誌を差し上げます〉

仲間求む

反核パシフィックセンターの活動に  
加わろうと思う人はいませんか?  
協力してくれる人はいませんか?

どうも気軽に事務局におたずね  
りください。ただ、事務局が  
あいていないときが多いので、  
前もって電話を付けてから  
いらしてください。毎週  
水曜夜が定例会です。



## 反核パシフィックセンター東京

〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内  
☎03(815)1648 FAX. 03(815)9325  
郵便振替口座:東京3-168332

反核太平洋

# 絵ハガキ

# 苦しめるもの のために

1セット 頒価 300円  
(4枚1組、カラー)



▲高山好子画

▶日本語とともに英語もついていますので、海外にも広げてください。

▶ハガキをとおして「核のない太平洋」と「脱原発社会」に向けたメッセージを伝えてゆきたいと思いつきました。

▶絵ハガキの売りあげは「反核パシフィック基金」として太平洋の人々との交流、資料・情報の収集などに使われます。

●申し込み・連絡先●

反核パシフィックセンター東京 または、  
水里子たかし 〒355-03 埼玉県比企郡小川町増尾52 ☎0493(74)0584

▲丸木俊画

郵便振替口座:東京5-159424(反核パシフィック基金)

『パンフィカ』1988年4月10日発行（毎月10日発行）  
第9期 第4号（通巻172号） 1975年8月20日 第3種郵便物認可



月報

反核太平洋

パンフィカ

公害を逃れ！改題

1988年4月特集号

▶ 編集・発行

反核パンフィックセンター東京

〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内

☎ 03(815)1648 郵便振替口座：東京3-168332

(口座名：反核パンフィックセンター東京)

▶ 頒価 400円 ▶ 送料50円

▶ 年間定期購読料4000円(送料こみ)